ファミリー・アンド・ヒストリー

〔第42回〕

龍とドラゴン

文 岩本耕太郎 text by Kotaro Iwamoto

今年の干支は辰ということもあり、辰つまり龍について考えてみます。干支の由来は「十二支を決めるために動物に召集がかけられ、到着した順で決まった」ということになっていますが、そもそも龍は伝説上の生き物であるのに十二支に入れられている理由はよく分かっていません。龍蛇信仰といわれるように、しばしば蛇と龍は同類として扱われることが多いのですが、十二支にはキチンと蛇が入っていますので龍は別ものという扱いになります。

日本において龍は、古事記で八岐大蛇退治の逸話が物語るように邪悪な存在として扱われることもたまにありますが、大抵は諏訪の龍神様というように神的な存在つまり善きものと扱われることがほとんどです。水や海を支配しているので船の舳先に龍神様として奉られることも多いですね。

中国では黄河から八卦を背負って龍馬が現れたという伝説があり、吉兆とされました。中国でも龍はことごとく神的なもの、あるいはとりわけ優れているものを意味していて、悪いイメージは全くありません。蛇足ですが明治維新の立役者である坂本龍馬は本名ではなく通称で、この伝説上の龍馬にあやかったものかもしれません。加えて龍馬の妻もお龍といわれており、偶然にしては出来すぎの感があります。

かように日本や中国では神的で善な存在である龍ですが、西洋では全く逆の存在となります。神々しかったはずの龍は西洋ではドラゴンといわれ、空を飛び火を吐く怪物となってしまいます。

ギリシャ神話ではゼウスと戦ったテュポーン、ヘラクレスに退治されたヒュドラがドラゴンです。また、中世ヨーロッパにおいてはジークフリートや聖ゲオルギウスの龍退治など、ことごとく悪役として最後に英雄によって退治されることになっています。このように西洋では嫌われ者の龍ではありますが、ヨーロッパの王や騎士は好んで龍の紋章を用いていました。これは龍を尊敬していたからではなく、龍退治の英雄としての誇りを示すためだったそうです。

東洋と西洋で龍の認識が真逆になってしまった理由の一つにキリスト教があるといわれています。教会は龍を悪の存在として位置づけ、それを退治する聖人伝説によって布教を進めようとしたといわれています。

profile
帝国クリニック院長
1959年生まれ。幼少期をボストンで過ごす。
山形大学医学部卒。米国イリノイ州立大学で分子生物学を研究、1993年より現職。
サーフィンとクラッシックカーをこよなく愛し、4世代7人家族。
著書に『患者さまが増える』(H&I出版)、『エグゼクティブが実践するたった一つの健康法』(中経出版)